

ハンガリーのお笑い芸人 ナジ・バンドー・アンドラーシュ

その7 現代版おとぎ話集～進化するネタ～

ナジ・バンドーのネタの翻訳を始めてから、ちよくちよくハンガリーの「You Tube」サイトを見ている。まだ若き日の彼が泣きそうな顔で「待った、待った、待った」と繰り返している「言葉パネル」や「コツカ通り」シリーズ等八十年代のネタが多いのだけれど、カセット・テープの声だけの上演を聞いた後でこれを見ると、いろいろと新たな発見がある。この場所でお客さんが笑っているのはなぜだろうと思っていたのが、表情や動作で、急に謎が解けたりする。ナジ・バンドーだけでなく、いずれはご紹介したいと思っている他の芸人さんのネタもたくさん見られるのだ。残念ながら全てが映像つきとは限らず、音だけのものもたくさんあるけれど。もう一つ残念なのは、いつの映像なのかがはっきりわからないことだ。「You Tube」に映像ファイルののせている人たちは、おそらくTV番組を録画してそれをアップロードしているのだろうが、それがいつ放送されたものなのかまでは書いておいてくれない。訳者が翻訳するネタは大抵は「ラジオ・キャバレー傑作選」(のカセット)からもってくるのだが、すでにその実況放送版からして、ナジ・バンドーの初期のネタ集ともいえる著書「路上一路傍にて」(1986年)に収録されているものと、内容がけっこう変わってしまっているのだ。とりわけどんどん別バージョンになっていくのがはっきりわかるのが、今回ご紹介する「現代版おとぎ話集」。昨年の一月に「テレポーディウム」というTV番組で昔のステージの特集をやったらしく、その一部が「You Tube」にアップロードされていた。1983年と1985年のこの「おとぎ話集」の上演映像を、現在のさすがにいささか老けたナジ・バンドーと先輩の大物芸人シャールドル・ジョルジが笑いながら見ている場面である。この映像ファイルのおかげで、「YouTube」とそれ以外の動画サイトで見られる「現代版おとぎ話集」は1985年のものであり、「路上一路傍にて」のおそらくは最初のバージョンは1983年にはすでにステージにかかっていたことがわかった。この二つの間には大きな相違があり、85年版では幾つかの話が姿を消し、同じネタでもすっかり内容が変わってしまったものもある。まずは「路上一路傍にて」にのっている最初のバージョンから～。

若者のおとぎ話

あるとき一人の貧しい若者が、入団申し込み書を手にして、とある事務所に入っていました、彼はそこで一人の禿げた年配の男を見つけました。

若者はすぐにその男に挨拶しました

「こんにちは、おじいちゃん！」

男は挨拶をかえしました。

「よく来たね・・・私をおじいちゃんと呼んでくれて君は運がいいよ。つまりここでは私がコムソール（青年団）の書記なんだ」

狐とからす

からすが、くちばしに大きなチーズをくわえてとまっていた、そして物語にあるように狐を待っていました・・・

彼はあのずるいやつが何と言おうと、チーズを落とすまいと決めていました。

狐がやって来て、木に向かって声をかけました。

「からすの兄弟、明日からチーズの値段が上がるそうだ」

からすはそれに対してこれだけ言いました。

「このくそばばあ！」

びんに閉じ込められた聖霊

昔一人の貧しい木こりがいました、彼には貧しい息子が一人いました。あるとき二人が森で木を切っていたとき、息子は父のリュックの中にジュースの入った1リットルびんを見つけました。

ビンの中から聖霊が息子に向かって叫んでいました。

「出してくれ！出してくれ！」

しかし息子は手を振って、こう言っただけでした。

「ばかな妖精め！・・・お前はそこでオレンジ・ジュースにおぼれるのさ。つまりこのスクリュー式キャップ付きびんはハンガリー製なんだから！（だから開けられっこないのさ！～おせっかいで心配性の訳者注）」

未来が見える、安全第一の老人

いつだったかバスと電車がもつとちよくちよく出あっていたとき、とある小さな村で一人の老人がバスに乗りました、そしてすぐ車掌がその隣に現れました

「どこまでのキップをお求めですか、パパ？」

「踏み切りまで、坊や！」

ラーコーツィ広場の娘たちのおとぎ話（民話）

かつて一人の金持ちのひもがいました・・・そして彼には三人の娘がいました。

だから金持ちだったのです！

娘たちはまぶしくてふためと見られないほどブスでした！（訳注 原文では「太陽は見つめることができたとしても、彼女らは見ないほうがよさそうだった」、ハンガリーの昔話の決まり文句「太陽は見つめることができたとしても、彼女は誰も見つめることができなかった（それほど美しかった）」の転用）

その娘たちは充分に問題をかかえていました・・・でもだれだって自身の三つの十字架を負っているのです！

あるとき彼女たちが運試しに出発したとき、彼女たちの前に一人のハンサムで、堂々たる勇士が立ちました。

娘の一人が呼びかけました

「ハンサムなお兄さん、あなたが一緒に連れて行ってくれるなら、幸せなんだけど」

「いいとも！」ハンサムで堂々たる勇士はそう言うと同時に自己紹介しました「コバーチ警部補だ！」

ソーセージのおとぎ話（女性たちのおとぎ話）

かつて一人の商人がいました、彼のところに一人のお客がやってきました。そのお客は店にまたやって来そうになかった、すなわち一見さんの客だったので・・・

お客は百グラムのソーセージを求めました。

商人は急いで包装し、彼女に差し出しました。

「これで終わりさ！・・・これ持って行っちゃまえ！」

老人と海（ヘミングウェーから）

長きにわたる疲れる戦いの終わりに老漁師は海岸に大きな魚の骨を引き上げた。

血まみれの手をシャツでぬぐうと、ザックを背中にかつぎ、村の方向へと出発した・・・

漁業共同組合まで立ち止まることもしなかった。

そしてそこで組合長の前に立った

「組合長同士！・・・やっぱり入会することにします」

幸福のおとぎ話

あるとき大変な金持ちのハンガリー人がいました。

すでに若いときに自分のために非常に美しい、おとぎの地下礼拝堂を作るほど金持ちでした・・・

それから死ぬまで、びっくりするほど幸せに暮らしましたとき。

かぶのおとぎ話

昔あるとき一人のすでに引退したコルホーズ団員がいました、彼には引退した妻がいました。二人はいつもコルホーズかぶを収穫していることで有名でした・・・そしてあるときたくさんの巨大なかぶがコルホーズの畑に生えるようになりました。

どんどん大きくなりました・・・どンドン！・・・心配事が！

そしてコルホーズの成長が止まったとき、おじいちゃんはこのかぶを引き抜こうとしましたが、うまくいきませんでした。おばあちゃんや孫たち、犬、ネコおまけにネズミまで手伝いましたがムダでした。終わりにはありませんでした。そこで軍隊が出ることに決まりました。

理屈にあったおとぎ話（狼と子ヤギ）

お母さんヤギが牧場に出かけました、そしてこんな風の子ヤギに懇々と言い聞かせました「私の声がするまでは、誰にもドアを開けてはいけないよ」

子ヤギはお母さんの戒めを心に刻みました。

しかし狼はこの話をきいていて、子ヤギが決して自分を中に入れないうとわかったので、お母さんヤギの方を喰ってしまいました。

世界平和のおとぎ話

あった、あった、おそらく本当はなかったのだろうが、かつて世界には平和があった・・・

かつてはあったが、以後は決してなかった！

あの猿が・・・あるいは人間が木から下りなければ、世界の平和ももっと続いたろうに！・・・

実況版（1985年に発売されたカセットテープ版の作品集「手の内をさらして」）

みんな、こんばんは！君たちにおとぎ話をしよう。最初のお話の題名は「人間のおとぎ話」だよ。

昔々あるところに、とても折り目正しくて、立派で、きちんとした、好意に値する親切な人がいました、そしてこの人はもう生きてはいません。

テープの実況版では「若者のおとぎ話」、「幸福のおとぎ話」、「かぶのおとぎ話」と「世界平和のおとぎ話」は姿を消し、上記の「人間のおとぎ話」が新たに加わっている。これ以外の話は、どれも内容的には変わっていない。

「若者のおとぎ話」では、この貧しい若者は久々の入団志望者としてめでたくすんなり入団させてもらえそうである。そう言えば第2回の「コツカ通り13番地~碧ゴキブリ77」に、ナジ・バンドーが「僕らの若いときは喜んでコムソールの集まりに行ったものさ」と言って意味ありげに客席を見まわすとお客さんが笑うシーンがあったけれど、純情なるティーン・エイジャーのためのピオネールならいざ知らず、青年団のコムソールともなると、もういいやと思って参加しなかった人も、あるいは参加しても内心いやいやだった人もいたのかもしれない。

「狐とからす」「ソーセージのおとぎ話」はどちらも、結びの文句とのミスマッチ感がポイント、前者はイソップの昔話風のお話の最後にばりばりの今風の悪態がとび出す、原文は「この善良で優しいおっかさん！」、なんでこれがののしり言葉なのかわかんないけど、よく使われる罵詈雑言。「ソーセージ

～」の方は逆で、意味深？なお話しの最後が「これでおしまい、行っちまえ！」というハンガリーの「むかし話」の定番の慣用句でしめくられる。

「ラーコーツィ広場の娘たちのおとぎ話」にでてくるラーコーツィ広場は、国際線列車の入り口である東駅から町の中心の繁華街のあるドナウ河畔に向かうラーコーツィ通りの途中、ブラハ・ルイザ広場で左折して進んだところにある広場だけれど、その手の商売の交渉場所だったなんて知らなかったなあ。ちなみに「YouTube」で見られる1983年版だと、ナジ・バンドーは娘たちに自己紹介しながらシャツのえりを持ち上げてみせてる。つまりコヴァーチ警部補は私服のえりの下にバッジを隠していたんですな。

「老人と海」だけ「～ました」でなくて「～だった」にしたのは、むろんヘミングウェーだったから。昔の映画でも出てきたけれど、社会主義体制の集団農場や各職種の組合に参加するのがイヤで、個人でやっていきます、と言いつつ張った人もたくさんいたようだ。

★

★

★

「You tube」で見られる「現代版おとぎ話集」（1985年版）

ある現代のおとぎ話

昔々あるところにとっても貧しい人がいました、でも今ではもっと大勢います。

ブダペストのおとぎ話

検査官がバスに乗りました、彼は若い連中がふざけているのに気づき、腕に腕章をつけると、あっという間にカエルに変えてしまいました。

もう一つの現代のおとぎ話（題名もおとぎ話）

生存のおとぎ話。いつのことかずっと昔、年金生活者がいました、月収は1800フォリントでした。明日は彼のお葬式です。

そして最後は信じがたいおとぎ話

お母さんやギが森に出かけました、そして子やギたちに誰が来てもドアを開けてはいけないと言いつけていきました、だが彼らは思い切って家の前に出て行きました、いかなる天の配剤か、ちょうどそのとき狼が獲物を探してうろついていました、やつは独り言をつぶやきました。「今ちくしょうめ！俺様がヴェジタリアンでさえなければなあ！」

「ブダペストのおとぎ話」にでてくる検査官というのは、バスや地下鉄にときどき抜き打ちで乗り込んできて「キップを拝見します」という職員さん、大抵二人組みだった。ブダペストのワンマン・バスは、キップの購入はキオスクなんかで乗る前、刻印は乗ってからバスの中にある小型のタイム・カードの刻印機みたいなやつに差し込んで自分でやっておかなくてはならないので（つまり運転手さんは一切タッチしない）油断できない、打印を忘れてしまうと切符を持っていても容赦なくけっこうな罰金をとられるのだ。

もう一つ確信が持てないのだけれど「カエルに」（ハンガリー語で”békává”）は、バス、地下鉄、路面電車等のブダペストの交通を一括するブダペスト市営交通局“BKV”（ベーカーヴェー）の語呂合わせなんだろうか？